

タスマン海峡を越えたマオリ移民
—オーストラリア・シドニー南西部郊外の事例から—

神山歩未（名古屋大学大学院文学研究科）

1. はじめに

本稿は、シドニー南西部郊外のマオリ・コミュニティに焦点を当て、彼らが移住先のオーストラリアでマオリ・アイデンティティを再形成する過程について記述することを目的とする。

マオリのオーストラリア移住は、ニュージーランド国内におけるマオリの都市への移住が激化した時代と同時期の1960年代から1980年代に急激に増加した。その後、1986年を境にさらに急激に数を増やしている（Hamer 2007: 15）。特にオーストラリア最大の都市であるシドニーが位置するニューサウスウェールズ州は、マオリ人口全体の35.5%（25,906人）が暮らしている（Australian Bureau of Statistics 2013）。

ニュージーランド国籍保有者がオーストラリアに入国する際、トランスタスマン渡航協定（Trans-Tasman Travel Agreement¹⁾）が適応され、入国査証の免除の他、無期限の就労の自由が認められる。しかしオーストラリアに移住したマオリは、ニュージーランドへ帰国することを念頭に置いており、永住権や市民権を取得せず²⁾、現地の主流文化に同化しないまでも現地の風土に適応しつつ、自らのマオリとしてアイデンティティを重要視し暮らしているとの報告がある（Hamer 2007: 61-62, Kukutai and Pawar 2013: 33）。

オーストラリアに移住したマオリは、マオリ・アイデンティティを再形成し継承していくうえで故郷とは異なる環境ゆえに生じる様々な問題に直面している。本稿では、マオリがオーストラリアに移住したことで直面した問題を整理したうえで、その問題にどのように対応しているのかみることにする。また本稿では、ニュージーランドでは先住民であるマオリが、オーストラリアへ移住することにより一移民として、現地の先住民アボリジニとの関係に配慮しながら展開する文化実践を、ディアスポラと先住民に関する議論に位置づける。

2. タスマン海峡を越えた移住

現在、ニュージーランドで出生した人のうち約16%が海外で生活していると報告されているが、そのうちの75%以上がオーストラリアで暮らしているとされる（Sanderson 2009: 299）。マオリの場合、マオリ人口の18%が海外で生活をし、そのうちの約92%がオーストラリアで暮らしている（New Zealand Herald 2011）。

1) 1973年にオーストラリアとニュージーランド両国間で定められた渡航、居住、就労の自由を認めた協定。

2) ハマーの報告によると、オーストラリアに移住したマオリのうちオーストラリアの市民権を取得しているマオリは全体の22.8%である（Hamer 2007: 62）。

ニュージーランドからやってくる移民の増加をうけ、2001年にオーストラリア政府は、ニュージーランド人に対する移民政策を変更した。それは、これまでは受けることが可能であったオーストラリアの社会保障が受けられなくするというものである。この移民政策の改正は、ニュージーランド政府が、国民の流出を防ぐために、オーストラリアと手をむすび制定したものだとも言われる (Birrel and Rapson 2001: 75)。それにも関わらず、2001年から2006年までの間に、ニュージーランドからオーストラリアに移住する人の数は2倍になった (Kukutai and Pawar 2013: 87)。さらに、このようなタスマン海峡を越えてやってきた移民は、移住先に完全に定着せず、絶えずニュージーランドとオーストラリアを行き来していることがその特徴として挙げられている (Bedford et al 2001:61)。

近年増え続けるマオリのオーストラリア移住をうけ、ビクトリア大学のハマートとワイカト大学のククタイが、人口統計調査を元に、定量的データからオーストラリアへ移住したマオリの分析を行っている。彼らの調査から、マオリのオーストラリアでの就労状況、マオリ語使用率、マオリがオーストラリアで抱える社会問題などが明らかになった。しかし、文化人類学的立場からオーストラリアに移住したマオリの日常を分析した研究は極めて少なく、オーストラリアでマオリがどのように暮らし、ニュージーランドとは異なる環境でどのようにマオリ・アイデンティティを保持、継承しているのか、その詳細は明らかになっていない。

ところで、近年のオーストラリアにおける移民に関する研究は、とりわけアジア系移民を中心に、多文化主義とマイノリティの関係に関心が寄せられてきた。他方、近年のディアスポラをめぐる議論のなかでは、グローバル化の進展により増大したビジネス・ディアスポラを、グローバル化とローカル化の架け橋となる存在としてとらえ、彼らが実践するアイデンティティ形成の動向に注目が集まっている (e.g. コーエン 2012)。双方とも、移民と国家ないし移民と主流文化を担う人々という構図で議論が展開されている。

オーストラリアへ移住したマオリが他の移民と異なり特徴的なのは、彼らが母国ニュージーランドでは先住民であるということを強く主張している点である。マオリは植民地化により失われつつあったマオリ・アイデンティティの再形成につとめ、権利獲得運動をダイナミックに展開している。そのためニュージーランドでは、白人主流社会と先住民マオリという二項対立の構図が常に存在している。そこで展開されるマオリのアイデンティティ再形成は、必然的に対主流社会を軸に展開される。一方、オーストラリアに移住したマオリの場合、移民として多文化主義政策のなかで民主主義を主張し、先住民を含めた共生する他の民族集団と同等の権利を求めようとする際、現地の先住民の権利を否定することにつながってしまう。つまり、母国においてマオリが主張する先住民であるがゆえに有している特権を否定してしまうというジレンマを抱えているのである。このように、オーストラリアに移住したマオリの場合、これまで蓄積されてきた多文化主義政策をめぐる主流文化と移民との関係に加え、先住民と移民、さらに言うならば母国では先住民である彼らと移住先の先住民という、異なるマイノリティどうしの特異な対立の構図が成り立つので

ある。

3. 調査地の人口概要

筆者は、ニューサウスウェールズ州³⁾ シドニー南西部郊外のキャンベルタウン市で2014年2月に短期調査をおこなった。キャンベルタウン市は、シドニーの中心から、南西へ約50kmの場所に位置した地域行政地区でグレーター・シドニー行政区に含まれる。キャンベルタウン市の総人口は、15万4,538人である(Campbelltown City Council, Population highlights 2013)。キャンベルタウン市の人口の2.4%にあたる3,556人がサモア人であり、キャンベルタウン市に暮らす太平洋諸島民のなかでは、サモア人が最多となっている。太平洋諸島民のなかではマオリが次に多く、全体の1.1%にあたる1,573人である。そしてマオリを含む太平洋諸島民の割合は全体の4.8%であり、これはキャンベルタウン市の人口の大半を占めるヨーロッパ系⁴⁾に次ぐ人口である(Campbelltown City Council, Ancestry 2011)。このように、市の特徴として太平洋諸島民が多い⁵⁾ことが挙げられるが、加えて、ニューサウスウェールズ州全体と比べると失業率が高く、また低所得層向けの公営住宅が多く建てられているのも特徴である。

4. 20世紀以降のマオリの渡豪

20世紀に入ると、ニュージーランドではマオリの都市化と呼ばれる現象が起きた。マオリの都市化は、マオリの近代化を進めただけではなく、自身のマオリ・アイデンティティを強く意識する契機ともなった。都市に移住したマオリは、マオリ・アイデンティティを求めて、都市でマオリ・コミュニティを新たに形成し、都市にマラエMarae⁶⁾を建設するなど、マオリ・アイデンティティ再形成を積極的に押し進めていく。そして、みずからが先住民であることを強く意識し、権利回復をめぐる運動を激化させていったのである(e.g. Walker 2004: 209-219)。

このマオリの都市化は、ニュージーランド国内だけに留まらず、地方をニュージーランド、都市をオーストラリアと措定したトランスナショナルな都市化を含意していたと考えられる⁷⁾。マオリのオーストラリアへの移住は、第二次世界大戦以降のオーストラリアに

3) ニューサウスウェールズ州は、オーストラリアの総人口約2348万人のうち約30%にあたる727万2,800人が暮らしており、オーストラリアでもっとも人口が多い州である(Australian Bureau of Statistics 2013)。

4) キャンベルタウンのヨーロッパ系の人口は約89%である(Campbelltown City Council, Ancestry 2011)。

5) 州全体の太平洋諸島民の割合は1.2%と、キャンベルタウンはニューサウスウェールズ州全体と比較しても、太平洋諸島民の割合が多い(Campbelltown City Council, Ancestry 2011)。

6) マラエとは、マオリの宗教的儀礼的建物で、マオリ・アイデンティティの拠り所とされている。伝統的なマラエは、親族集団ごとに所有されるもので、親族の知識が表象されている。冠婚葬祭など、マオリの文化的行事が催される。都市に建てられたマラエは、親族集団を基盤とする伝統的なマラエと異なり、部族の垣根を越え、マオリどうしだれでも集うことができるマラエである。1980年代頃、マオリ文化の復興を求めた動きのなかで、多くの都市のマラエがオークランドなどの大都市に建設された。

7) 1960年代頃には4,000人ほどだったオーストラリアのマオリ人口は、1980年代までに、27,000人ほどにまで増加している(Hamer 2008:156-158)。

における移民労働者の需要と人口増加を目的とした政策と、ニュージーランド国内の職を求めたマオリの都市化という動きと呼応して急増している。この時期にオーストラリアに移住したマオリは、それ以前にオーストラリアに移住したマオリ⁸⁾よりも、ニュージーランドのマオリというアイデンティティを強く意識していることが報告されている (Hamer 2007: 65)。

マオリの渡豪理由は、大きく 2 点挙げられる。1 つ目は、オーストラリアにおける労働者需要と高い賃金である (Birrell 2001: 64-65, Hamer 2007: 41-42)⁹⁾。次に、ニュージーランドにおけるマオリに対する否定的なイメージからの脱却が挙げられる。ニュージーランドでは、絶えずメディアによりマオリの否定的な面が報道され、ドラッグやギャング、家庭内暴力等の問題の他に偏見や差別といった問題を抱えているとハマーは指摘する (Hamer 2007: 46-18)。以前、筆者がオークランドで調査をおこなった際にも、オーストラリアから親戚を訪ねて帰郷したマオリから、「オーストラリアにはワイタンギ条約の重みがなく、マオリは社会的にも最下層ではないので自由だ」¹⁰⁾との語りが聞かれた。マオリの渡豪理由には、より自由な生活をもとめたマオリの隣国オーストラリアへの憧れを垣間みることができるのである。

5. 文化とアイデンティティをめぐる問題

オーストラリアに移住したマオリは、自らのマオリ・アイデンティティを維持し継承していく上で、故郷から離れて暮らすゆえに生じるさまざまな問題を抱えている。第一に、マオリ語使用頻度の問題が挙げられる。ニュージーランドでは、1978 年マオリ語法 (Maori Language Act 1978) によりマオリ語が公用語に指定されている他、マオリ語によるテレビやラジオ配信、コハンガ・レオ *Kohanga Reo*¹¹⁾ やクラ・カウパパ *Kura Kaupapa*¹²⁾ などの教育機関の充実など、マオリ語 (再) 習得に接する機会にめぐまれている。そのため、ニュージーランドにおいて日常的にマオリ語を使用しているマオリは全体の 21.3% にのぼる (Statistics of New Zealand 2013)。しかしオーストラリアでは、ニュージーランドで得られるようなマオリ語に接する機会はほとんどなく、マオリ語を使用するのは家庭内に限定されてしまう。オーストラリアでマオリ語を日常的に使用しているマオリは全体の 6.3% と、ニュージーランドと比べると極端に低いことがわかる (Kukutai and Pawar 2013: 87)。

次に問題になるのが、ファーナウ *whānau* (拡大家族)¹³⁾ の結束の弱体化である。ファーナウは子育てやしつけ、日常的な相互扶助を行うなど、マオリが日常生活を営む上での

8) マオリは 1700 年代後半頃から白人とともにオーストラリア、特にシドニーに來航していたという (ブレイニー 1980:33)。また、捕鯨船の船乗りとして世界中を旅していたとされている (Belich 1996: 145)。

9) 渡豪動機を就労と挙げたマオリは全体の 50.4% にのぼる (Hamer 2007: 43)。

10) マオリ男性 50 代 (2010 年オークランドにおける筆者調査より)。

11) マオリ文化に根ざした幼児教育施設。コハンガ・レオは言語の巢 (language nest) の意味。

12) マオリ文化に根ざした初等教育施設。教育はすべてマオリ語で行われる。

13) マオリ社会は理念的に大船団集団 *waka*、部族 *iwi*、準部族 *hapū*、拡大家族 *whānau* という分節構造を有している。

中心的な集団で、ファーナウ内で物質的、精神的サポートを行っている。オーストラリアに移住したマオリは、ファーナウと離れて暮らすことで、ファーナウ内でおこなわれるサポートが得難くなる。そして強いファーナウ内の結束が、マオリの子どもたちに社会関係を学ぶ機会を与え、年長者への敬意や若者の社会的責任に対するしつけや教育になるため、ファーナウの結束が弱体化することにより、これらの教育が欠落しがちになってしまう。加えて、マオリの伝統的な知識を有するとされるカウマートゥア *kaumātua*（長老）の不在により、次の世代のマオリにマオリの知識を伝えることが難しくなっていると指摘されている（Hamer 2007: 105, 149）。

最後に、マラエの欠如が大きな問題として挙げられる。土地との関係などを表象するとされるマラエは、そもそもオーストラリアの土地につながりを説明付けることができないため、理念的にはマラエを建設することは不可能である。とはいえ、オークランドなどの都市でみられる土地との関係を表象しない都市のマラエのようなマラエを建設することは可能である。しかし安易なマラエの建設は、その土地の先住民を冒瀆することにもなりかねない。こうした文化的な問題や金銭面などの問題から、シドニーでは、20年以上もマラエの建設計画の発案と廃案が繰り返されており（Hamer 2007: 82）、未だマラエの建設に至っていない。マラエが存在しないことは、オーストラリアで葬儀などマオリの文化的行事を行う際、問題として浮かび上がってくるのである。

上記の問題の結果、若年層、特にオーストラリア生まれのマオリのデンティティ意識の低下が指摘されている（Hamer 2007: 149）。実際に筆者の行った調査でも、オーストラリア生まれで、マオリ語を話せず、マオリの文化もよく分からないが、ニュージーランドへの望郷の念が強く、オーストラリア社会には帰属感を抱いていないという若者が確認できた。そうした若者は、学校を中退する、職に就かない、または街で不良グループと群れるなど反社会的になり、道を踏み外しやすくなるとハマーは指摘している（Hamer 2007: 149）。

6. シドニーのマオリ・コミュニティの実践

先に挙げた問題に対し、キャンベルタウン市に暮らすマオリは、アイデンティティ再形成を目指してさまざまな挑戦を行っている。以下、その具体的な事例を報告する。

事例 1. *whanaungatanga* と *whānau* の再解釈

キャンベルタウン市には、オークランドで形成されているマオリのコミュニティ¹⁴⁾に類似したコミュニティが形成されている。彼らは、コミュニティの成員が集うことをファーナウンガタンガ *whanaungatanga* と呼ぶ。マオリ語辞書によるファーナウンガタンガの意味は、「関係 (relationship)」「親類関係」「家族関係の意識」である（Rayan 2009）。マオリ

14) 都市で形成されるマオリ・コミュニティは、組織化しないまでも、都市という生活の場を基盤に、マオリどうし、精神的なつながりを有する集団である（神山 2010）。

人研究者のミードはファーナウンガタンガを「ファカパパ*whakapapa*¹⁵⁾を包括した関係」と定義し、近くにしようと離れていようと、親類どうしサポートし合うことを指すとしている (Mead 2003: 28)。

一方、シドニー郊外で形成されているマオリのコミュニティでは、ファーナウンタンガは、「互いの知識を共有し、集い、家族の一員になること」であると認識されている。同様にミードも、ファーナウンタンガは時に拡大解釈され、知識や経験を共有することによって血縁者ではないが家族のようになった人どうしや、マラエへのつながりについても、これに該当するとしている (Mead 2003: 28)。キャンベルタウン市のマオリ・コミュニティの会員は、あたかも親族であるかのように常に連絡を取り合い、葬儀などの特別な行事の時の手伝いだけでなく、生活全般のサポートを行っている。すなわち、キャンベルタウン市のマオリ・コミュニティは、拡大家族を意味するファーナウ *whānau* が意味する範囲を拡張し、キャンベルタウン市で生活するマオリどうし、あたかも親族であるかのような集団を形成する。ときにその集団をオーストラリアのファーナウと呼ぶ。加えて血縁に基づかないマオリどうしの関係を築くことをファーナウンタンガと呼んでいるのである。

事例 2. 国境を越えたつながりの形成

シドニーでは、毎年2月にワイタンギデー・フェスティバルが行われている。ワイタンギデー・フェスティバルは、イギリスとマオリのワイタンギ条約締結を祝うイベントである。地元のマオリ・コミュニティと市の行政の他、建設・鉱山・林野・エネルギー労組組合やニュージーランドのマオリ部族信託委員会などの協賛のもと開催される。2013年は、約8,000人が参加し、2014年も同様にシドニー在住マオリの関心を引きつけた。イベントは、9時から始まり、4時に終了した。その間、設置された舞台では、地元のマオリによるハカやポイダンスなど、さまざまなマオリのパフォーマンスアーツが披露された。また、会場では、マオリの伝統的な食事ハンギ *hangi* や、木彫り、骨彫りなどのマオリの工芸品が販売されていた。筆者が訪れたときには、故郷のマラエの修築費調達を行っている店も存在した。フェスティバルは、家族で店を出展することや、家族どうし誘い合わせてフェスティバルに参加するなど、親族が集う契機にもなっている。

さて、ワイタンギデー・フェスティバルでは、マオリ文化に親しみ、楽しむことの他に、故郷の部族信託委員会への登録がおこなわれている。それぞれの地域の信託委員会のブースが設けられ、部族の情報が公開され、部族名がプリントされたTシャツ等グッズの販売そして、信託委員会への登録が行われている。故郷の部族が運営する信託委員会へ登録すると、地方の部族の活動や資金等の情報、申立てや政府との和解に関する投票権、信託委員会が設ける補助金を受け取る権利などが与えられる。信託委員会へ登録する際、家系図の他、故郷のマラエ、所属するハプー *hapū*¹⁶⁾ を申請する項目が設けられているため、申請

15) ファカパパ *whakapapa* とは、親族の系譜 (genealogy) を意味する。

16) マオリは理念的に大船団集団、部族、準部族、核家族という分節構造を有している。ハプーは準部族に当た

を通して自らの出身地と明確な所属を認識させられる。それは、個人と故郷の部族集団とのつながりを再形成することを可能にするのである。

ワイタンギデー・フェスティバルは、マオリ文化を楽しむだけのイベントではなく、シドニーで暮らすマオリの家族どうしが集う機会になる他、故郷の部族集団へのつながりを再形成する機会や、故郷のマラエを意識する契機になっている。生活圏におけるマラエの欠如により、マオリ・アイデンティティの拠り所の一つを欠く彼らにとって、国境を越えた故郷へのつながりが、彼らのアイデンティティの拠り所の一つとなっていると考えられる。

事例 3. コミュニティセンター

先に述べたように、オーストラリアにマラエを建設することは理想的に不可能である。またハマーの報告によると、シドニーにはマオリが運営し集うことができるコミュニティセンターは存在しない (Hamer 2007: 77)。しかしキャンベルタウン市には、マオリどうしが集うことができるコミュニティセンターが存在している。

本稿で紹介するコミュニティセンターは、1995年にマオリによって建てられたコミュニティセンターで、広いホールとキッチン、洗面所を備え、会食をともなった行事の開催を可能にしている。そのためコミュニティセンターでは、コミュニティの会合や親族の集い、会食会、ワイタンギデーのお祝い、マオリ語教室、若者向けのリーダー研修会、行政が運営する健康促進フォーラムなどが催される。すなわち、当該コミュニティセンターは、ニュージーランドの都市で見られる都市のマラエに非常に類似した機能を有している。しかし、コミュニティセンターではオーストラリアの法律により宿泊ができないため、マラエで開催可能な宿泊を伴う行事や、葬儀は執り行うことができない。コミュニティセンターの管理者は、実際に、コミュニティセンターで葬儀を執り行いたいという相談をマオリから受けるという。

このコミュニティセンターが特徴的なのは、コミュニティセンターがニューサウスウェールズ州の地域行政下に設置された太平洋諸島民コミュニティ組織に組み込まれている点である。そのため、マオリだけでなく、地域に暮らす人ならだれでも集える施設として解放されている。コミュニティセンターでは、行政や企業から資金援助を受け、マオリ・コミュニティと太平洋諸島民のコミュニティが共同で行う企画を日々行っている。多文化主義を政策としているオーストラリアでも、個人間の問題が、民族間や人種間の問題として転化されてしまう場合がある (e.g. The Sydney Morning Herald Online 2014)。異なる民族集団のコミュニティに所属する若者たちの街での些細な喧嘩が時にコミュニティ間の緊張関係を産み、時にコミュニティ間の対立にまで発展してしまうのである。コミュニティセンターは、さまざまな企画を通してマオリと太平洋諸島民コミュニティの構成員が常日

る。

頃から交流をもつことで、それぞれのコミュニティ間の対立を回避させる役割を担う。日々行われる交流のなかでそれぞれのコミュニティの年長者どうしが対話を行い、それぞれのコミュニティの構成員どうしが良好な関係を構築しておくことにより、問題が起きた際、コミュニティのリーダーどうしの対話を円滑に進め、問題を急速に収束させるシステムを形成しているのである。

コミュニティセンターは、マオリの文化的行事を行う際の疑似マラエとなるだけでなく、マオリどうしをオーストラリアのファーナウとして関係づけさせる場となる。加えて、「都市のマラエ」にはない側面として、同地域に暮らす多様な文化背景を有する他民族集団のコミュニティどうし、またその成員どうしをつなげる場として機能しているのである。

事例 4. 「U-Turn Waka Project」：若者のアイデンティティ再形成

2011年、アイデンティティ・クライシスに陥り問題を抱える若年層のマオリに、マオリの伝統的知識を学ばせることにより、アイデンティティの再形成を行い更正させるプロジェクトが発足した。プロジェクトは、問題を抱える若者を正しい道へと導く航海と、航海をする際のマオリの伝統的な乗り物ワカ *waka* (カヌー) の双方を指し示す「U-Turn Waka Project」と名付けられた。このプロジェクトはマオリの伝統的知識を学ばせ、若者にアイデンティティ再形成をうながし、更正させるためのものであった。マオリの若者は18ヶ月間マオリの彫師から伝統的な彫刻を学び、カヌーを作成した。プロジェクトは、キャンベルタウン市行政や、太平洋諸島民コミュニティなどの支援のもと進められたため、マオリの若者の他、他の太平洋諸島民の若者も参加した。

マオリのアイデンティティ再形成を目指した伝統的文化の伝承の他に、このプロジェクトで注目したい点は、地元のアボリジニとの関係である。プロジェクト終了時には、作成したカヌーを海に漕ぎ出している。通常、マオリの伝統的なカヌーを、アボリジニ¹⁷⁾の領地に許可無く漕ぎ出すことは、地元のアボリジニとの摩擦を生じさせかねない。そこで、カヌーを作成する際、プロジェクトの責任者らは、地元のアボリジニの長老を訪ね、許可を得てプロジェクトを開始したという。さらに地元のアボリジニの象徴であるトカゲをカヌーの船首に彫り込むことにより、彼らに対する敬意をカヌーに表象した。また、カヌーを漕ぎ出す際には、地元のアボリジニの長老を招待し、出航の承認を得てから、漕ぎ出している。若者にマオリの伝統文化を学ぶ機会を与え、アイデンティティ再形成を行うと同時に、ニュージーランドとは異なりオーストラリアという土地だからこそ存在する移民と

17) キャンベルタウン市のアボリジニは、タラワル *Tharawal* の人々であったとしている。しかし、山内によると、キャンベルタウン市付近でダラワルの子孫と名乗る人は少数である(山内 2010:61)。筆者は、調査中に「アボリジニ・コミュニティ」という言葉をたびたび耳にした。本稿で言う現地のアボリジニは、特定の地縁的な基盤を元に組織化された集団ではなく、マオリ・コミュニティと対置される概念的な存在としての現地のアボリジニ・コミュニティを指す。またこのコミュニティは、山内の言う、「アボリジニ関係の業務に携わる組織の活動を基盤とする」(山内 2010:65-66) コミュニティである可能性が高い。現地のアボリジニ・コミュニティについては目下、調査中である。

先住民の複雑な関係を、プロジェクトは巧みに乗り越え、地元の先住民との摩擦を回避したのである。一方で、マオリの年長者からは、マオリの伝統的なカヌーに、他の文化を表象する図を彫り込むことや、太平洋諸島民の若者を乗せることは遺憾だと批判も受けている。

7. 考察と今後の展望

本稿では、オーストラリアにおいて、マオリがアイデンティティの再形成をおこなう様子を具体的にみてきた。筆者は、オーストラリアにおけるマオリのアイデンティティ再形成をめぐる動向は、ニュージーランドでみられるようなマオリ文化を復興させようという動きや、先住民と政府という政治的な駆け引きの枠組をのりこえ、マオリとしての文化的アイデンティティの再形成という点に特化された動きであると考えられる。しかし、マオリの文化的アイデンティティの再形成一点に集中してしまうと、共生する他民族集団、特に地元の先住民アボリジニとの軋轢を産みかねない。たとえば、2014年に発生したアボリジニとマオリの木彫りの彫刻パネルの問題である。シドニー郊外のブラックタウン(Blacktown)とニュージーランドのポリルア(Porirua)の姉妹都市30周年を記念して、ナーレージン保護区(Nurragingy Reserve)のニュージーランド・南パシフィック庭園にマオリの木彫りの彫刻パネルがおかれた。しかし、地元のアボリジニ¹⁸⁾は、彫刻パネルを地元のアボリジニの許可無く設置することは、彼らを軽んじる行為であるとしてマオリと行政を弾劾したのである。オーストラリアの主流文化を担う人々を含めた移民が文化的行事を執り行おうとする際、そこにはアボリジニへの配慮が必要となる。そうした手続きが正統に行われない場合、アボリジニ側から弾劾されるのである。移民が民族アイデンティティを志向する場合、その実践は排他的に展開されがちである。

ところで、マオリは母国ニュージーランドにおいては先住民であり、その権利を強く主張している。彼らは、彼らの母国での立場とそれに付随する主張を考えた場合、移住先であるオーストラリアの先住民アボリジニに対して格別の配慮をせざるを得ないと考えられる。アボリジニに十分配慮しないようなふるまいは、母国における自らの主張の正当性を危うくすることにつながりかねない。

こうした問題を乗り越える可能性をもつ実践のひとつに、ディアスポラがあると考えられる。オーストラリアに移住したマオリは、一部のマオリ人研究者により「マオリ・ディアスポラ」と呼ばれている(Hamer 2007, Kukutai and Pawar 2013)。オーストラリアに移住したマオリが、そもそもディアスポラと呼べるかどうかについての詳細な検討については別の機会に譲りたいが、もしディアスポラを、クリフォードが論じるように、未来志向的な豊かな共存のための資源(クリフォード 2002: 313-312)として積極的にとらえることができれば、マオリ・ディアスポラは、移住先で多様な他者と非排他的に共存していく道を

18) ブラックタウンに文化的な関係があるとするダラグ Darug。しかしブラックタウン行政は、ダラグはブラックタウンに対して合法的権利はないとしている。

探る上での一助となりうるだろう。

クリフォードが指摘するように、現代のディアスポラ・ネットワークは、ヘゲモニー化する技術やコミュニケーションに取り込まれることなく、それらを利用した地域横断的な社会運動を可能にし得る。それは、国民国家、グローバル・テクノロジー、市場の内部にありながらそれらに抵抗する非同盟のトランスナショナリティを回復させる可能性をもつ（クリフォード 2002: 313-314）。オーストラリアに移住したマオリは、ニュージーランドでは先住民であるという自らの位置づけを意識しつつ、故郷とのつながりを維持し、また再形成しながら、アボリジニとの緊張関係を回避させる手だてを講じている。それは翻って、自らの母国における先住民主張を支持することにもつながる。

オーストラリアに移住したマオリは、「先住民」アボリジニにとどまらず、他のさまざまな地域からやってきた移民、そして白人主流社会との接触のなかで、クリフォードのいう「ローカルなレベルを越えた新たな『伝統的』あり方」を強化できる可能性を有している。もちろん、こうした動向を阻害したり抑圧する力も決して小さくはないが、対立と軋轢の後に豊かな共存が訪れる可能性も想定し得る。

最近になり、シドニーにおいて、過去 20 年間以上、発案と中止が繰り返されてきたマラエの建設計画が本格的に持ち上がっている。2014 年のワイタンギデー・フェスティバル時に、建設予定地などが大々的に発表され、フェスティバルに参加したマオリは、このニュースに大いに盛り上がった。しかし、アボリジニの土地にマラエを建設することにより、先住民と移民、双方の権利をめぐる摩擦が表面化すると懸念される。マオリがオーストラリアという地に建てられたマラエをどのように正当化していくのか、マラエの建設をめぐる、マオリが地元のアボリジニにどのように働きかけるのか、今後の彼らの動向に注目したい。

【謝辞】

本稿は、名古屋大学の 2014 年度卓越した大学院拠点形成支援補助金による国外旅費支援(研究題目:マオリ・アイデンティティのトランスナショナルな再創造—シドニーのマオリ・コミュニティとマラエに注目して—)の成果の一部である。本稿のもととなった日本オセアニア学会第 31 回研究大会(2014 年 3 月 21 日)での報告に対しては、会員の方々から貴重なご意見、ご教示をいただいた。また調査から本稿作成まで、椋山女学園大学杉藤重信教授から貴重なご指導、ご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

文献等一覧

Bedford, Richard., Ho, Elsie., Hugo, Graeme.

2001 “Trans-Tasman Migration in Context: Recent Follows of New Zealanders Revisited”, *People and Place*, Vol.11, No.4, p53-p62

Belich, James.

1996 *Making Peoples: A History of the New Zealanders From Polynesian Settlement to the End of the Nineteenth Century*, Hawaiian Press

Birrell, Bob., Rapson, Virginia.

2001 “New Zealander in Australia: The End of An Era?”, *People and Place*, Vol9, no.1, p61-p74

Hamer, Paul.

2007 “Maori in Australia: NgāMāori I Te Moemoeā”, Te PuniKokiri

2008 “One in Six? The Rapid Growth of the Māori Population in Australia”, *New Zealand Population Review*, 33/34, p153-p176

Kukutai, Tahu., Pawar, Shefali.

2013 “A Socio-demographic Profile of Maori in Australia”, *NIDEA Working Papers No. 3*, University of Waikato, National Institute of Demographic and Economic Analysis

Mead, Hirini.

2003 *TikangaMāori: Living by Māori Values*, Huia

Rayan, MP.

2009 *The Raupe Pocket Dictionary of Modern Māori*, Penguin Publishing

Sanderson, Lynda Margaret.

2009 “International mobility of new migration to Australia”, *International Migration Review* 43, p292-p331

Walker, Ranginui.

2004 (1990) *Ka WhawhaiTonuMatou: Struggle without End*, Penguin

神山歩未

2010 「都市マラエと都市で暮らすマオリの「マオリタンガ」—オークランド南部の事例から—」『比較人文学研究年報』No.8, p41-p56

クリフォード、ジェームズ

2002 『ルーツ—20 世紀後期の旅と翻訳』、毛利嘉孝・有元健・柴山麻妃・島村奈生子・福住廉・遠藤水城訳、月曜社

コーエン、ロビン

2012 『新版グローバル・ディアスポラ』、駒井洋訳、明石書店

ブレイン、ジェフリー

1980 『距離の暴虐—オーストラリアはいかに歴史をつくったか』、長坂寿久・小林宏訳、サイマル出版会

山内由理子

2010 「「あの人は本当はアボリジニではない」—シドニー南西部郊外のアボリジニにおけるコミュニティ意識とアイデンティティ—」、『オーストラリア研究』23号, p57-p72

ウェブページより (2014年6月15日時点)

Australian Bureau of Statistics, 2013

<http://www.abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/home/home?opendocument>

Blacktown Sun

“Blacktown Aboriginal Elder blasts council plan to put Maori poles into Nurragingy Reserve, February 14, 2014”

<http://www.blacktownsun.com.au/story/2089077/blacktown-aboriginal-elder-blasts-council-plan-to-put-maori-poles-into-nurragingy-reserve/>

Campbelltown City Council, Aboriginal History, 2011

<http://www.campbelltown.nsw.gov.au/Aboriginalhistory>

Campbelltown City Council, Ancestry, 2011

<http://profile.id.com.au/campbelltown/ancestry>

Campbelltown City Council Employment Status, 2011

<http://profile.id.com.au/campbelltown/employment-status>

Campbelltown City Council, Population highlights, 2013

<http://profile.id.com.au/campbelltown/highlights>

New Zealand Herald

“18 per cent of Maori living overseas, November 29, 2011”

http://www.nzherald.co.nz/nz/news/article.cfm?c_id=1&objectid=10769488

The Sydney Morning Herald

“Threats of reprisal as racial tensions rise in aftermath of rape, February 15, 2014”

<http://www.smh.com.au/nsw/threats-of-reprisal-as-racial-tensions-rise-in-aftermath-of-rape-20140214-32rld.html>